



TITLE:

各地よりのたより

AUTHOR(S):

CITATION:

各地よりのたより. 天界 1939, 20(225): 94-96

ISSUE DATE:

1939-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167915>

RIGHT:

各地よりのたより

昭和14年度本會總會記

本年度總會は、和高商當局の援助の下に、十一月19日無事舉行した。以下當日の様子を略述する。

1) 講演 (14時30分—16時、於階段大教室)

演題「宇宙測量の一百年史」 山本一清博士

豫定たる13時より少しばかり遅れて開演す。來會者約100名。講演の内容が一般に稍々高尚でないかと思はれたが、最後迄皆熱心に傾聴せり。

2) 總會 (16時半—18時、於別室)

小槇支部長司會の下に開催、各部の報告あり。水野氏の報告は小槇氏代讀、伊達氏より祝電あり、その他、部報には特別の事項なし。

次で神田氏より、滋賀縣の新に建立せられる近江神社に本會より日時計寄進の事に關して質問すれば、山本會長答へて、その用意ある事に及ばれ、村山辨次氏の原稿(天界掲載の筈)をも朗讀せられたり。高城氏立ちて「日時計よりむしろ漏刻を寄進しては如何、それに尙ほ本會が卒先して全國に呼びかけては？」との質問に、一部賛成あり、結局別に委員を選出して委員附托とす。

又、次の4氏は創立以來の本會の功勞者なるにより、名譽會員に推薦の件、高城氏提議、満場一致可決す。

會員 百濟教猷氏(大阪) 宮森作造氏(大阪)
小槇孝二郎氏(和歌山) 中澤登氏(長野)

3) 懇親會 (18時—19時半、於同室)

山本會長に阪神の地方員、紀伊支部員及び高商會員を加へて會食す。和氣霧々裡に自己紹介、質問等續出す。この頃より雨となり、觀測會中止す。懇親會終りて山本會長歸京せらる。

4) 觀望會 (20時—21時、高商觀測室)

折からの雲間を利して紀伊支部員、高商會員若干名熱心に火星、木星、土星、月を觀望す。

5) 聯合座談會 (21時—23時半、元の室にて)

高商會員、支部員一同、小槇、高城2氏を中心として、雜談珍間に花を咲かして散會。

追記 當日本會總會のために御援助下さつた和高商御當局、殊に加川先生の御力添には、紀伊支部の名に於いて滿腔の感謝を捧ぐる次第です。

(2599—11—20日記 和陸院にて白衣の諸君と語りつゝ 野村生)

東亞天文協會支部函館星の會報告

◎本會は昭和十二年一月に出來たもので本年一月支部に加入された北日本唯一の支部である。協會員は6, 7名に過ぎないが、支部員30名を數へ、毎月例會開催及び會報「ボラリス」を發行してゐる

◎十月1日、會報「ボラリス」第六號發行。

◎十月28日、十月例會、月蝕觀測會を開催。

廳立函館中學校の階上にて同校理化研究會と合同觀測をなし、58耗屈折2機を以て、一時雲に邪魔されたが寫眞2枚を撮り成功に終り、續いて土・木・火星の觀眺をなし和氣霽々たるものであつた。觀覽者約40名。(10月29日 田村記)

紀伊支部通信

本年度十一月例會(支部)及び和歌山「星の會」發會を兼ねて、十一月26日(土)19時より和歌山市金龍寺村六の野村方にて會合、參會者は阪田晃、島田晋村、野村秋馬(以上協會側)及び東原忠雄君(和高商天文研究會代表)の4名にて、和歌山「星の會」の會則決定、會の結成をみるに至つた。目的は、高商天文研究會及び東亞天文協會員にあらざる一般同好の士との聯絡を測るのが、第一眼目である。

26日會則印刷の上、各方面に發送した。尙支部と聯合にて、十二月は名草小學校に於いて、十五年一月は粉河町に於いて例會開催の件も決定した。

尙、目下小槇支部長と相談の上、流星課の仕事に支部に於いて援助し、是非必要なる文献は將來のため支部の名に於いて逐次プリントとして出版したい意向である。(12月3日 野村記)

た　　よ　　り

拜啓

急にお寒く相成りました。先生御はじめ、皆様、ますます御健安に被爲入御事と、お喜び申上ます。

偕て、早速御禮申上ぐべき處、大へんおそくなりまして、何共お申譯御座いません。此度、不肖なる私に名譽會員の光榮を擔はせていただき、誠に勿體ない事に存じ、厚く御禮申上げます。

顧みますれば、大正十年のはじめ、先生から御手紙をいただき、夫れがもととなつて、縣主催として上田、長野、松本に天文學の講習開かれ、親しく先生の御教へを願ひ、其節、下高井、諏訪等の教育會にてもお願いたし、尙又他に

上田女學校、日進校、田中の學校、小諸、到る處にて御講話を願ひ、私には、また、汽車中にて、歩行中にて、御宿舎にて、御懇なるお教へをいただき、尙又、書中にて、お願いたす場合には、先生には、如何なる御多忙の御中にも、御返事をいただき、直接、有がたいお教へを下さり、何共、言葉を以て御禮申上げることが出来ません。思へば、實際、胸一ぱいに相成申候。何の御恩報じも出来ないでおりまして、申し譯け御座いません。然るに、此度のやうな御待遇にあづがり、全く勿體ないことで御座います。厚く々々御禮申上ます。

淺學菲徳の身では御座いますが、今後一層相はげみ、感謝報恩の道にいそしみ申し度、何卒また御願申上ます。

乍末筆、先生ますます御自重、御自愛、斯界のために御貢獻御願申上ます。

昭和14年12月10日

中 津 登

山本先生侍史

日 光 節 約 法 是 非 の 投 票

米國カリフオニヤ州では、來1940年の夏期に、又々日光節約法を實行すべきや否やを投票にかけたところ、同法を可決した昨年よりも7169票も多く、總計219286票の賛成者が獲られた。之れにより、1940年は四月の最終日曜(28日)から九月の最終日曜(29日)まで、同州では時計を1時間進めて、市民の日常經濟合理化と、保健、風紀の向上を圖ることとする由。(1939年10月28日 サクラメント 發)

“The eclipse in 1999 is as safe as the balance of a life insurance company; the next quantum jump of an atom is as uncertain as your life or mine.”

Sir Arthur Eddington

西曆1999年に日食があるといふことは生命保健會社のバランスの如く確實なものであり、一原子からの次ぎの量子の飛躍が何時あるかといふことは、吾々の生命の如く不確實なものである。

エディントン